

漢代の孤児をめぐる一・三の問題

東 晋 次

はじめに

日本における秦漢家族研究は、戦前から現在まで、論議の密度は時期によって異なるが、一貫して秦漢史研究の重要な課題となってきた。佐竹靖彦氏の学説史整理によれば、現在は第三期の段階に入り、新出土資料もふまえ、また農業史研究・集落史研究・豪族研究の発展によって、より広い視野からの秦漢家族研究が遂行されるべき段階にきているという。現時点での動向について言えば、家族と社会との関係についての考察がみられつつあるが、大枠としては家族形態論がなお主流で、家族間の関係や郷里社会の秩序構造における家族の位置づけについては今後さらに発展させなければならない課題となっている。これらの問題へのアプローチは種々の面からなされなければならないが、小論では、孤児の養育をテーマとして、上述の課題の一斑を明らかにするための試みを行ないたい。というのは、孤児という存在が家と家、家と族を仲立ちするものであることに着目し、その孤児が家や族によってどのように養育されているかの実態を探ることによって、家と家、家と族との諸関係、また郷里社会と家との関係の問題にアプローチすることができるのではないかという着想による。

従来の孤児についての研究は皆無と言ってよい。家族論の中で時には取り上げられることもあるが、それらは断片的でしかない。孤児の問題は先述のごとく家族の問題への接近のためにここでは取り上げられるが、しかし孤児の問題はそれだけにとどまらず、漢代社会史の一面、子供観や親族観念についても有益な考察が導き出せるとともに、幼少な皇帝即位にとまなう外戚の後見という政治上の問題にも関わってくるものである。なお、漢代の文献では「孤児」と記すことは極く少なく、現代で用いる孤児とは意味上もやや異なるのであるが、表題ははじめ文中では便宜上「孤児」の語を用いることにすることを始めにお断りしておく。

1 「孤」とは

孤児たることを表わすものとして、文献上には、「少孤」・「幼孤」・「少失父(母)」といった定型的な表現がみられる。それでは「孤」というのはどのような事態なのか。これは言うまでもなく、幼くして父を亡くした者を指す。『孟子』梁惠王章句下に、「老而无妻曰鰥、老而无夫曰寡、老而无子曰獨、幼而无父曰孤」とあるのがそれである。所謂「鰥寡孤獨」という「天下之窮民」の中の、「孤」は、その一つである。ただ、

「幼」とか「少」とは年齢のどのくらいまでを言うのかとなると定かではなく、又、女子についても「孤」と言うのか否かには疑問がある。前者については、『漢書』食貨志上に、「民年二十受田、六十帰田。七十以上上所養也。十歳以下上所長也。十一以上上所強也」とある伝統的觀念が参考になる。つまり、十歳以下が国家の扶養義務の対象となることからすると、十歳までを「幼」・「少」とすることも可能であろう。ただ、漢代では、十五歳が、算賦ないし力役賦課年齢であったから、国家構成員としての資格を具備すると考えると、十五歳までを幼・少とすることも考えられる。また、『礼記』「深衣」の「如孤子衣純以素」の鄭玄注に「三十以下無父称孤」とあるが、この場合はやや特殊な考え方からくると思われる。この点についてはあまりはっきりとした区切りを考えることはそれほど重要ではないから、ここでは漠然となるが成人前を少・幼としておくことにする。後者については、『後漢書』皇后紀上、章帝馬皇后について「少喪父母」とあり、『三国志』卷三四先主穆皇后伝に、皇后自身をさておいて兄のことを「少孤」と記していることからすると、女子のことを積極的に「孤」とは言わないと思われる。ただし孤児史料で女子のことを「孤」といった例は、『後漢書』皇后紀下、桓帝鄧后についての一例のみ検出できる。女性についての記述そのものが少ない正史の性格からすると、この例によって女子を「孤」とは言わないとは考えにくいから、この場合は皇后であるという特殊例であるとしても、女子も「孤」と言うこと一応考えておく。とすると、「孤」とは、「子供が成人前に父を亡くした」事態を指したものとすることができよう。

ところで、「孤」とは父を失った者のみを指し、母を失くしても必ずしも「孤」とはいわないのは何故なのであるかという疑問が湧いてくる。父は一家の生計の中心として、子供の養育にとって必須の経済的資

料の稼ぎ手として存在するから、母がいなくても日常的養育の務めを履行する女性、継母や乳母のような存在さえあれば困らないからだという回答がただちに提示される。しかしそのような養育に関わる経済的理由だけではなさそうなのである。『後漢書』列伝七一劉翊伝に、権貴者からの圧力によって山沢の利をある大姓に独占させる件について太守から相談を受けた劉翊が、「名山大沢の以って封ぜざるは、蓋し民が為なり。明府これを聴せば、則ち佞倖の名を被るなり。若し此を以って禍を獲るとも、貴子申甫は則ち自ずから以って孤ならざるなり」と答えているが、もし太守が権貴に逆らい、そのために命を落とすようなことになっても、民のため、正義のためにした太守に対する社会的評価の故に子供が「孤」にはならない、と解することができよう。この場合、普通父親が亡ずれば「孤」と称される筈であるのに、劉翊が「不孤」だと言っている背景には、孤とは単に父がいなくというのみではなく、もっと深い理由、当時の「孤」に対する意識が存したとみれないか。このことは、『礼記』「深衣」の鄭玄注に、「三十以下無父称孤」とあることと関わる。つまり、『礼記』「曲礼」には「人生十年曰幼学、二十曰弱冠、三十曰壮、有室」とされており、「内則」には「二十而冠……三十而有室、始理男事」とある。男子は三十で妻を娶り一人前になる（『論語』爲政「三十而立」）わけであるが、それまでは父子関係の中において父の庇護・指導を受けるべき、未だ社会の成員としての資格を十分具備していない存在である男子にとって、社会との媒介となる父の不在が、社会につながる術がないという意味で「孤」であつたのではないかと考えられるのである。劉翊の場合でいえば、申甫は義によって死んだ父の社会的評価によって社会的に認められた存在として「不孤」だと考えられていたのではなからうか。母は父のように社会とのつながりの役割を果たし得ない存在と

考えられていたのではないか。

次に、孤児発生の理由を考えていくとき、「孤」の独特な意味が新たに付加される。『周礼』「天官・外饗」の「邦饗耆老孤子」に対する鄭玄注に「孤子者、死王事者之子也」とあり、「王事」の為に父が死んだものを孤と称していたとされている。『管子』中匡の「継絶世、起諸孤」への房玄齡注に、「孤謂死王事者子孫」とあるのは、「子孫」としているのは異なるが、『周礼』鄭注を踏まえているのであろう。つまり、男子が老病で死亡する以外の要因は「王事」つまり公共の事に由るのが大部分であつたろうと考えられる。戦闘が最も大きな要因となつたであろうことは言うまでもない。『史記』卷四三趙世家に、「趙氏壯者皆死長平、其孤未壯、可伐也」とあり、卷八一趙奢伝にも同様な記述がある。秦軍との長平の戦で趙は四十五万もの將兵を失つたとされているが、それらの子供が孤児となつたのである。また、戦闘による成年男子の死は「孤」のみではなく「寡」をも生み出したであらう。

『礼記』王制に、鰥寡孤獨の定義を述べ、続けて「此四者天民之窮而無告者也、皆有常饋」とあるが、国家が此の四者に対する常饋＝衣食の賜与を義務づけられているのは、「鰥」以外が国家の公事によって生み出される可能性の高かつたことによるのであろう。さればこそ、漢代に入つても、「鰥寡孤獨」に対する賑恤策は兩漢を通じて常に施されているのである。特に、『前漢書』には「羽林孤児」なる語が見いだされ、『漢書』「百官表」に、

羽林掌送從、次期門。武帝太初元年初置、名曰建章宮騎、後更名羽林騎。又取從軍死事之子孫、養羽林官、教以五兵、号曰羽林孤児。

とあり、戦闘などで死亡した兵士の子孫が羽林官で養育され、兵士としての訓練を受けて羽林の一部隊を構成していたことがわかる。羽林孤児

は戦時には徵発されて實際に戦闘に参加していることは、「宣帝紀」神爵元年の条その他にみえる。兵士の家は孤児が生ずる可能性が高く、国家による何らかの養育の手段が構ぜられていたと思われる。因みに、忠節を尽くして事に死んだ者の子供を郎中に補すことが後漢には行われた。『後漢書』列伝十六伏隆伝、七一劉茂伝にその実例がみられ、惠棟は『後漢書補注』において、「漢法死事之子皆拜郎中」と言っている。この場合「死事之子」が孤児つまり成人前であつたか否かははっきりしないし、またその死んだ父が単なる一兵卒か下級の吏員ではなく一定以上の官位にある場合に限られたであろうことも容易に推測されるから、すべての孤児が国家の優遇を受けたとはとうてい考えられないが。

2 孤児の養育

孤児は以上のように理念的には国家の扶養を受ける存在ではあつた。しかし、實際の養育はそれだけでは完結しない。それでは孤児はどのように養育されたのであろうか。以下、『漢書』・『後漢書』の孤児史料を列挙しよう。

【漢書】

- ① 朔上書曰、臣朔少失父母、長養兄嫂、年十三學書……（六五東方朔伝）
- ② 勝少孤、好學、從（夏侯）始昌受尚書及洪範五行伝（七五夏侯勝伝）
- ③ 河東平陽人也、徙杜陵。翁婦少孤、与季父居。為獄小吏、曉習文法（七六尹翁歸伝）
- ④ 涿郡高陽人也。少孤、歸諸父、使牧羊沢中、尊竊學問、能史書、年十三求為獄小吏、數歲給事太守府（七六王尊伝）

⑤ 汝南上蔡人。家世微賤、至方進父翟公、好學爲郡文學。方進年十二、失父孤學、給事太守府爲小史。……辭其後母、欲西至京師受經。

母憐其幼、隨之長安、織履以給(八四翟方進伝)

⑥ 魏郡繁陽人也。祖父及父積功勞、皆至郡守、武帝時徙茂陵。鄴少孤、其母張敞女、鄴壯、從敞子吉學問、得其家書。……初鄴從張吉學、吉子疎又幼孤、從鄴學問、亦著於世(八五杜鄴伝)

⑦ 杜陵人也。……元帝時、徵(父)遂爲京兆尹、至廷尉。遵少孤、與張竦伯松俱爲京兆史(九二陳遵伝)

以上七例が『漢書』から検出し得た「孤」の事例の主なものである。この七例について、孤児が誰によって養育されたかに注目すると、①、

⑦の不明を除くと、②、③、④がそれぞれ族父・季父・諸父、つまり父の兄弟あるいは同族の父と同世代の者、⑤は母子による生活、⑥は母の兄弟つまり舅である。ただし、②と⑥は単に學問を教授されたに過ぎず、その家柄からすると母子同居であつたかも知れない。注意すべきは、七例はすべて武帝期以降に生存した人々に関わるということ、この点については後節で再びふれる。

次に『後漢書』の例であるが、『後漢書』から数多くの孤児史料を検出し得る。ここでは典型的な養育事例を養育者の別に分類して以下に示す。

【A】 叔父 從兄弟 宗族等

① 光武九歳而孤、養於叔父良(光武紀上)

② 光武族兄也。……嘉少孤、性仁厚、南頓君(光武父)養視如子、後與伯升共學長安、習尚書春秋(列伝四劉嘉伝)

③ 援之族孫也。少孤、依從兄毅共居業、恩猶同產(列伝一四馬援伝)

④ 太原広武人也。家産千金、少孤、爲宗人所養、而遇之不以理、及長

又不還其財。党詣鄉県訟、主乃歸之。既而散与宗族、悉免遣奴婢(列伝七三周党伝)

【B】 母・兄弟

① 南陽穰人也。父稚成帝時爲廬江太守、有清名。丹七歳而孤、小心孝順。後母哀隣之、爲衣裝買産業。後從師長安(列伝十七郭丹伝)

② 潁川舞陽人。……世爲鄉里著姓、父尋建武中爲隴西太守。棧四歳而孤、養母弟、以孝友称。及壯、推先父余財數百萬、与從昆弟、鄉里益高之(列伝三五韓棧伝)

③ 李曇少孤、繼母嚴酷、曇事之愈謹、爲鄉里所称法、養親行道、終身不仕(列伝四三徐穉伝)

④ 会稽上虞人也。少孤、母常販繪爲業、雋以孝養致名、爲県門下書佐(列伝六一朱雋伝)

⑤ 太原晋陽人也。少孤、獨与母居、家貧以筋力致養、孝行著於鄉里(列伝七一劉茂伝)

⑥ 汝南召陵人也。少孤、兄弟四人皆同財業、及各娶妻、諸婦遂求分異、又數有鬭爭之言(列伝七一繆彤伝)

【C】 外家

① 南陽宛人也。少孤、婦外家復陽劉氏(列伝一二朱祐伝)

② 父余王莽時爲楊州牧、敞少孤(東觀記曰、余卒、時敞七歳、依姉壻父九江連率平河侯王述。明年母復終、會述失郡居沛郡。建武三年余外孫右扶風曹真爲梧安侯相、迎敞婦養視之。至四年叔父援從車駕東征、過梧安、乃將兄弟西。敞年十三至洛陽、留寄郎朱仲孫舍、大奴步護視之)(列伝一四馬敞伝)

③ 代郡人也。少孤、依外家居。九歳通論語孝經(列伝二六范升伝)

④ 南陽宛人也。家世衣冠、暉早孤、有氣決。年十三王莽敗、天下乱。

与外氏家屬從田間奔入宛城（列伝三三朱暉伝）

【D】 特に明記のないもの

- ① 琅邪姑幕人也。少孤、年八歳為人牧豕。郷里徐子盛者以春秋經授諸生數百人、宮過息廬下、樂其業、因就聽經、遂請留門下（列伝一七承宮伝）

- ② （馮）良字君郎、出於孤微。少作梟吏、年三十為尉從佐（列伝四三周燮伝）

- ③ 東平寧陽人也。梁宗室子孫、而少孤貧、賣書於市以自資（列伝七〇下劉梁伝）

ここに挙げた事例を含めて検索し得た『後漢書』の孤児史料は全部で五七例にのぼる。『漢書』と比べて『後漢書』の孤児例の多さには驚かされるが、それについては後に述べるとして、『三国志』から検索し得た例について若干付言しておく、後漢時代的事例を分類したのと同様、叔父・族父、母・兄弟、外家の三類型が『三国志』の諸事例にも見られる。ただ三国時代的事例で特異なのは、『三国志』卷三四先主穆皇后伝に、

陳留人也。兄梟壹少孤、壹父素与劉焉有旧、是以举家随焉入蜀。

とあり、又、『三国志』卷四一張裔伝に

蜀郡成都人也。……少与犍爲楊恭友善、恭早死、遺孤未数歳。裔迎留与分屋而居、事恭母如母。恭之子息長大、爲之娶婦、買田宅產業、使立門戸。撫恤故旧、振瞻衰宗、行義甚至。

とあるような、父の友人によって孤児が母と共にあるいは家を挙げて養われる事例がみられることである。このような例は『漢書』には皆無であるし、後漢時代の孤児史料中にも存在しない。ただし、後漢時代には、士大夫間の交友関係が緊密になっているし、又、『後漢書』に妻子を友

人に託した話があるから、⁽⁶⁾このような父の友人つまり血縁的・姻戚的關係がない他人が孤児や女性の養育・保護を責任をもって果たすことは後漢時代から次第に生まれ始めてきたであろうと推測され、このことは、血縁的關係以外の人間関係が比重を増してくるという点で興味深いものがある。

・ここで孤児の生育の様態について若干述べておきたい。上記史料からも伺えるように、父が財産を残した場合は、生計のために働く必要がなく、幼少といえども母や兄弟と共に暮らすことができた者も存在した。しかし好意的な同宗人ばかりとは限らず、後見人として管財した宗人が、成人後も財産を返さず、訴訟沙汰にまで至った周党伝の話（【A】④）や、死んだ弟の妻子から家産分割した半頃の田を横奪してしまう話（『太平御覧』卷六三九所引『会稽典録』）も残されている。宗族・外家の世話を受けられる場合や、兄が成人していたり、母が何らかの生業を有する場合を除いて、孤児たちは母や兄弟とともに貧困な生活を強いられた。とりわけ目につくのは、当時孤児の主要な仕事とされていたであろう、豕や羊の見張りである。前漢では王尊の「牧羊沢中」であり、後漢では承宮の「年八歳、為人牧豕」などがある。⁽⁷⁾これらは幼少な者でもできる仕事ではあれ、当時は賤視されていたであろう。『後漢書』列伝五四呉祐伝に、

及年二十喪父、居無擔石、而不受贍遺。常牧豕於長垣沢中、行吟經書。遇父故人、謂曰卿二千石子、而自業賤事、縱子無恥、奈先君何。祐辭謝而已、守志如初。

とあり、牧豕のような仕事は賤業であると見なされていたことがわかる。前掲『後漢書』【D】①列伝一七承宮伝の李賢注引『統漢書』に、

宮過徐子盛好之、因棄其猪、而留聽經。猪主怪其不還、求索得宮、

欲答之。門下生共禁止、因留之。

とあり、牧畜の仕事させられていた孤児の境遇が察せられる。『三国志』巻二三楊俊伝に、

本郡王象少孤特、為人僕隸。年十七八、見使牧羊、而私讀書、因被箠楚。俊嘉其才質、即贖象著家、娉娶立屋、然後与別。

とある。孤児なるが故に「僕隸」の状態にあったものが、牧畜の仕事させられていたケースである。承宮や王象は他人の好意によって悲惨な境遇から脱出できた幸運な者というべきであろう。

以上のように、父の余財があるものや富裕な外家などに引き取られた孤児たちの中には、学問を修め、官界へ出仕するものも多くいたし、そうでなくとも、先の王尊や翟方進の如く、刻苦しながら勉学に励み、獄吏の助手や太守府の小史となり、のち立身していったものもあった。しかし一方では、そのような十分な生育環境を享受したり、幸運や努力によって成長することのできなかった孤児達も多くいたであろう。多くは病氣や飢えによって死亡したり、売られて奴婢となり、また或いは他人に雇われ「傭」となる者もあった。恐らく、無頼の仲間に入り無惨な最後を遂げた者や、罪を犯し辺境に謫された者も多かったであろう。大体が、孤児史料として残された記録は、「少孤」であるにも関わらず何らかの社会的成功をかちえた人々のそれである。記録に残された者以外の膨大な孤児達がその背景に存在することは言うまでもない。

さて孤児養育事例は以上のごとくであるが、問題とすべき点を挙げる

- 一、孤児養育主体の順序、誰が面倒を見るかの当時の常識的順序如何。
- 二、父死亡後、孤児は養育された家の戸籍に付されるか否か。
- 三、『後漢書』に比べ『漢書』孤児事例の少なさ、又武帝期以降に現れ

てくること、更に、後漢時代に明確に現れてくる外家の扶養をどう考えるか。

などが考えられる。以下これらについて考察することにする。

3 養育者の順序と戸籍の問題

滋賀秀三氏は、「父が幼少の子供を残して死亡し、母が改嫁しようとするとき、子供らのうちとくに男子は、父の同族がこれを引取って育てるのを常とし、後夫の家につれ子することを容易に許そうとしない傾向があるに對して、女子はつれ子することは比較的寛大に許される」(『中国国家族法の原理』創文社一九六七年 四六二頁 以下の滋賀氏の見解はすべてこれによる)としている。漢代においてもこのことは大体の傾向として当てはまるかと思われる⁸⁾。ただここでの滋賀氏の指摘は、母が改嫁しようとする際についてのものであって、然らざる場合は如何ということになれば問題は自ずから別である。先掲の孤児史料についてみてみた場合、大体以下の順序で養育者が自然に決まったと思われる。

(A) でければ母と孤児のみで生活する(兄弟同居の場合有り)。

(B) 母も失ったり、母が改嫁する場合は同族の誰かが引き取る。

(C) 何らかの理由で外家に母とともに引き取られる。

ただしこれには若干の注釈が必要である。というのは、(A)の場合においても、父の兄弟つまり伯叔父が何らかの援助を惜しまないということが当時の常識となっていたふしがある。『太平御覽』卷六三九所引『公稽典録』に、孤児の伯父が弟の妻と孤児に飢饉の際わずかの米粟を与え、その代償として、弟と均分した半頃の田を奪取した。孤児が成人して訴訟したとき、郡の掾史たちは順孫にあらずとして孤児を非難した

が、督郵たる鐘離意は、伯父として孤弱の面倒を見るのは当然であり、人道上の正義であるという観点から、孤児の訴えを正当とする意見を述べ、掾史たちもそれに従った、という話がある。これは後漢の初期の話である。このように、(A)の場合においても、常にその孤寡に対しては父の兄弟あるいは同族の援助が為されるべきであるという意識が存在した。従って、母と孤児のみで生活することが後漢になると多くみられるが、いろいろな事情から母子のみの生活が不可能な場合には、当然父の兄弟の家が同族の誰かのもとに寄寓したり衣食の援助を受けることになる。『後漢書』に「孤兄子」とか「孤弟子」に財産を譲与したり、面倒をみたりという例がいくつかあるが、鐘離意の言にあるように、それは「人道正義」と考えられていたことによる。ただし、鐘離意の考え方は理念的なものであり、当時においては掾史たちの意見にもあるように、あくまでも分財別居した家と家とはたとえ兄弟であれ、その相互扶助は寒族・貧家ではドライに割り切られていたというのも当時の実情であったかもしれない。

いずれにしろ、父死亡後の家の生活資料に余裕があれば、少なくとも後漢時代には母子の生活がなされることが一般的であったようである。『漢書』七例のうち、父の兄弟(族父も含む)は三例、母が一例である。数少ない事例から結論を出すのは早計ではあるが、周知の項羽と項梁との関係の例もあるように、前漢では父の兄弟が孤児の養育に任ずるのが最も一般的ではなかったかと思われる。これに対し、『後漢書』の孤児史料五七例のうち、母(後母や兄弟あるいは祖父母も含まれる)と同居する例が非常に多く十七例に達する。伯叔父の養育は七例(ただし、孤兄弟子に対する伯叔父の例はこれ以外四例あるが、これらはすべて財産譲与の例である。また従兄と同居一例)、外家は四例(女性の出嫁先を

含む)、宗族三例となっている。この数字は検索し得た限りのもので確定的なものではないが、常に父の兄弟の後見が期待されていたとしても、父の兄弟と母という養育主体が前・後漢で逆転していることが注目される。これは恐らく、『後漢書』に現れた孤児の多くが、富裕な官僚・豪族の家の子弟であることが直接的な要因であろうが、しかし後漢時代における母や兄弟の比重が高くなっていることは注意すべきであろう。次の問題は孤児を含む家の戸籍の問題である。

再び滋賀氏の言を引用する。「戸絶とは、一戸のうちに男性またはその妻が一人も存在しなくなった状態をいう」(三九五頁)。この戸絶定義からすると、「男性」がすべて成人男子でなければならないように受け取られるが、それは当然で、滋賀氏は、子供が存在しない状態を前提にしてこう定義しているのである。従って、成人直前であろうと幼少であろうと、孤児が存在すれば家の存続は保証されることになり、戸絶の事態は避けられることになる。実際、孤児と母の同居の家について、滋賀氏が、「寡婦たる母は、当然の権利として、家産を分得して独立したむすこと同居共財の生活を続ける。(中略)またむすこが複数の場合、母の同意なしに相互の間で家産を分割することも許されない。名義においてむすこに帰する得分は、実質においては母子共同体の得分たる性質を帯び、ここに、母を頂点として、一人または数人のむすこが同居共財の生活を営む一個の家が成立することとなる」(四二五頁)と言っていることからすると、ここでの「むすこ」が成人男子か否かを問わず、家が成立して戸絶とはならないことになる。

以上のように、滋賀氏の見解に従うと、孤児の家は大方は戸籍上も存続したであろうと推測することができる。しかしながら、滋賀氏の考察の対象は、氏自身が明言しているように、私法上の家であり、公法上の

戸ではない。「私法上の家は社会的現実としてのみ存在し、公権的に形式化せられることはなかったのである。唐の戸令に『諸戸主皆以家長爲之』というように、なるべくは社会的現実としての私法上の家を、公法上もまた一戸として把握しようとするのが法のたて前であつたけれども、両者は必ずしも常に一致していたわけではない。同じく唐の律令において、別籍と異財とが、また同居と同籍とがそれぞれ別個独立の事がらとして扱われていることから知られるように、立法者自身もまた、両者の範囲が常に一致するとは限らないことを予定していたのである」(五一頁)と述べて、「戸籍上の家(すなわち『戸』)なるものは、本書の当面の課題にとつては、しばらく考慮の外」であると明確に言っているのである。とすると、孤児の家の戸籍問題は、公法的に別途の考察を必要とすることになる。

仁井田陞『中国身分法史』(復刻版 東京大学出版会 一九八三)は、「同居・同財即ち同籍といはないけれども、通例はこの三者は相伴ふと見得ると思ふ」(三五二頁)として、現存最古の戸籍である西涼建初十二年籍の分析を行っているが、それらによる仁井田氏の見解の中に、「戸主(家長)には先づ戸内の男子がなるべきであつた。敦煌等発見の西涼戸籍や唐代の戸籍等によると最尊長男子が戸主(家長)となつてゐる。然し戸内に他に男子なきときは、意思能力なき幼少の男子と雖も戸主となり家長となつた」(四〇〇頁)とある。この見解は、結局のところ先掲の滋賀氏の指摘と同一結果をもたらすものであり、ここでは両氏に従ひ、孤児の家の戸籍は孤児を戸主としていたと考えておくのが妥当ではなからうか。しかしながら、仁井田氏は「戸主たり家長たるには年齢上の制限がなかった」(四〇〇頁)ことと関連して、後見法について述べ、「漢代以降の多くの資料によると、孤児の後見人となるものは、

普通伯叔父であつた。唐以前の後見は國家の制定法の中には見当たらず、後見人たるべき者の順位に就ても、格別法規のあつたわけではなからうが、伯叔が一般に後見人となつたのは、それが被後見人の父の近親でもあり、被後見人の家長であることも多かつたからであらう」(八四三頁)と言っている。これは先述の母との同居の場合においても常にその背景に伯叔父の援助が期待されていたことと一致する指摘ではあるが、伯叔父が被後見人の家長であることが多かつたということは、孤児が伯叔父の家に引き取られたことを示しており、この場合における戸籍がどうなつていたかについては氏は語っていないし、西涼建初十二年籍の構成は三世同居で、敦煌戸籍では三世同居は普通であると言っていることからしても、漢代孤児の家の戸籍はどうなつていたのか問題として残る。

『後漢書』列伝七〇下侯瑾伝に、

少孤貧、依宗人居。性篤學、恒傭作為資。暮還輒然柴以讀書、常以礼自牧。獨處一房、如對嚴賓焉。

とあり、この場合は、宗族のうち誰かの家に寄寓し、一房に住して自ら傭賃でもって生活の資を得ていたのである。侯瑾の母が生存していたかどうかはわからないが、その戸籍はどうなつていたのであろうか。『後漢書』列伝三四張禹伝に、

趙國襄國人也。……父卒、汲吏人贈送前後數百萬、悉無所受。又以田宅推与伯父、身自寄止。

とあり、この場合も母の存在が不明であるが、父の残した財産を伯父の管理下に移してその世話を受けたことがわかる。伯父が近くに住んでいれば、伯父の家に移り住んだのではなく、もとの家に住んだのであろうが、戸籍はどうなつたのであろうか。堀敏一氏によれば、「秦代では、同居家族からなる家が戸籍をもち、単婚家族が室を形成した。同居

が単婚家族の場合には、同居と室は一致したが、同居が父子あるいは兄弟からなる複合家族の場合には、室はその内部に存在することになった」とし、この同居と内部の室（房とか床と後世ではいう）をもつ構造は漢代のみならず後世にも受け継がれたとしている。家族の構造のみならず、戸籍についても漢朝が継承したとすると、上述の侯瑾や張禹などは、侯瑾が宗人の一房に居住し、張禹が伯父の管理下にある住居に仮に住んでいたとしても、宗人・伯父の家の戸籍とは別個の独立した戸籍をもっていたということになる。ただ、『漢書』惠帝紀即位元年の周知の詔における同居の範囲を、どう理解するかによって異なった結論もでてくる。この点佐竹靖彦氏は、「この詔の同居は、郷里において父母妻子、とくに父母と同居するものととらえる方が事態に適合的であろう」とし、それは、「父子終身同居制家族（つまり三族制家族―引用者）の最初の礼教上法律上の確認であった」と言っている¹¹。佐竹説によっても、孤児の戸籍が独立なることは変わらないことになる。他方、戸籍制度上の戸としての家を問題にした越智重明氏の結論は、漢代の戸籍は兄弟の終生同籍を基本とする小宗制的血縁関係者をもって構成されていたとするもので、その血縁的範囲は、生存しておれば父と伯叔父、本人とその兄弟（その子孫を含む）、伯叔父の子たる従父兄弟に及ぶものである¹²。越智説では、孤児の多くは伯叔父などの扶養者と同一戸籍に含まれたことになってしまう。

この問題に関連する史料を求めると以下のようなものがある。それは孤児の戸籍復活についてのもので、『三國志』卷四三馬忠伝に、

巴西閬中人也。少養外家、姓狐名篤、後乃復姓改名。

とあり、幼少時は養家の戸籍に付せられて（？）いたのが、成人して旧姓に復すということがあったことがわかる¹³。この場合、母の実家

で養育されたのであるが、母が生存していたかどうか定かでない。『華陽国志』卷一巴西郡閬中県の項に、「大姓有三狐、五馬、蒲、趙、任、黄、嚴也」とあり、恐らくは、馬忠の父の家馬氏と母の出身狐氏とは大姓同士の婚家であつたろうと考えられる。馬忠は、馬氏一族の扶養を受けず、一旦は母の一族に引き取られてその戸籍に入り、成人後馬姓に復したのであろう。この例は、後に問題とする、孤児扶養における外家の役割に関わるものである。

また次のような例もある。『三國志』卷四一張裔伝に、

蜀郡成都人也。……少与犍爲楊恭友善。恭早死、遺孤未數歲。裔迎留与分屋而居、事恭母如母。恭之子息長大、爲之娶婦、買田宅產業、使立門戶。撫恤故旧、振贍衰宗、行義甚至。

とあり、この「使立門戶」を新たに戸籍を立てさせたと解釈すれば、孤児の戸籍は扶養者の家の籍に著けられたということになるが、この場合は、それまで同じ屋敷内に住んでいたのを、結婚を契機に新たに家を建築してそこに移り住んだということを示していると解して誤りないであろう。ただし、母と孤児の戸籍は張裔のそれとは別戸籍となっていたのかどうかについては決め手がない。

以上の如く、孤児を含む家の戸籍については決定的な史料がなく、現在の段階では保留せざるを得ないが、しかしながら、漢代の民に対する賜爵事例を見ると、「爲父後者」に限定した賜爵の場合には必ず、他の場合にはみられる（そうでない場合もあるが）鰥寡孤独への帛や粟の賜与が見られないことである¹⁴。このことは何を意味しているのであろうか。それは、「爲父後者」の中には孤児が含まれていたからではないか。つまり、孤寡への賑恤がこの場合には二重（寡婦のみの家ではこの限りではない）となるから、鰥寡孤独への賜与がなかったことになるのではない

いか。とすると、孤児といえども、嗣子であれば戸を嗣ぐ者との觀念が皇帝による賜爵の場合においても考慮されていたことになる。ということは、孤児の戸籍問題については、孤児の存在する限り、戸籍は抹消されなかったのではないかと推測するのが妥当のように思われる。

以上の理解が正しいとして、孤児の戸籍問題と関連する一家の口数について若干付言しておく。これは、戦前からの家族形態論の論争の中でも一つの根拠として論議されてきたもので、最初に一家平均口数についてのまとまった見解を提示したのが牧野巽氏である。¹⁵ 牧野氏は、現在統計数値を知り得る漢代の前後二回にわたる戸口統計の一戸平均口数は常に五人前後であること、前漢の戸口統計は信用できるが、後漢のそれは伝写の誤りか統計の杜撰か信用し難いこと、漢代の戸口統計によれば、一戸平均口数が四人以下の郡国が全体の二割に達すること、などを指摘し、その他の史料の検討と合わせて、漢代の家族が従来言われてきたようには大きくないこと、むしろ小家族であることを主張したのである。

牧野氏の見解は戦前の家族論争を生み、宇都宮清吉・清水盛光・守屋美都雄諸氏による牧野批判とそれに対する牧野氏の反批判を通して、戦前・戦後には小家族説が通説のような状況となる。宇都宮・守屋両氏の戦後の家族論争後、しばらくは休止していた家族論が、越智重明氏によって再度取り上げられた。¹⁷ 越智論文は、社会に実際存在する家族ではなく、戸籍制度上の戸としての家を問題にする。越智氏の結論は、先述の如く、漢代の戸籍は兄弟の終生同籍を基本とする小宗制的血縁関係者をもって構成されていたとするもので、いま問題にしている戸口数についていえば、漢代全国的に一戸口数の相当高い戸のあったことを統計資料から推測している。ただし、越智氏は一戸口数の相当高い戸が存在した理由を、「当時の戸にも当然戸の構成員が一人とか二人とかいったものもあった

筈である」とするだけで、具体的な指摘はない。筆者は、その理由の一つが、当時多数に上ったであろう孤寡の家の存在に求められるのではないかと考える。

仮に、一人ないし二人の戸つまり孤寡の家が全戸数の一割を占めたとして、三・五人を一割減じた戸数に乗じて、それを全戸数で除しても、その一戸平均口数はそれほど増加しないから、確かに、四ないし五口が分布上最頻値であろうが、次に示すように、漢代には七から十口の家も存在していたのである。『漢書』平帝紀元始二年の条に、

賜死者一家六戸以上葬錢五千、四戸以上三千、二戸以上二千。

とあり、これは旱蝗の災害に際しての救済の詔の一節である。「六戸以上」とあるのは、口数が七から九や十の家の存在をも想定しているわけである。実際、兩漢書には、兄弟五人とか十人近い子供の数の記述が見られる。ときには十から二十人以上の記録もあり、この場合は特殊例であろうが、子供が五人としても両親その他を含めて七から十口になるわけである。

以上のことから、一ないし二口の家と、七から十口の家とが、相殺しあって平均四ないし五口と言う数値に結果するということも考えられる。とすると、漢代家族の構成員数を、約五人平均としてしまつてそれで總体的に考えてしまうのではなく、ごく少数のあるいはかなり大きい口数の家族も当時かなりの程度に存在していたことを考慮に入れなければならないのではないか。¹⁸

4 孤児の生育と漢代社会

次に問題とすべきは、先に提出した、『後漢書』に比べ『漢書』孤児事例の少なさ、又武帝期以降に現れてくること、更に、後漢時代に明確に現れてくる外家の扶養をどう考えるか、である。外家の問題は次節に回すとして、前漢から後漢にかけての孤児の生育の実態と国家や社会との関わりなどから上記の問題に接近することが必要であろう。それはまた、孤児の生育過程における郷里社会の役割や、郷里社会における家族・宗族の役割と位置づけの問題にも関わるものである。

これまで見てきたように、前漢と後漢での孤児事例の数の差に大きな開きがあることは、いったい何を意味しているのだろうか。単に班固と范曄両者の歴史叙述の方法的相違に由来していると考えてすむであろうか。両漢書の孤寡に関する記述を通覧すると、『漢書』では、一般的、抽象的な表現が多くみられるのに対し、『後漢書』ではそのような表現がずっと少なく、孤寡に関する具体的な記述が多くなっている。このことは、両漢時代において「孤寡」なる者に対して国家ないし社会そのものがどのような対応をしていたかの相違に因るのではなからうか。以上の問題を考える際、次のような問いを提出することができよう。それは、何故、個人の列伝などに「少孤」という経歴を記さねばならないのか、また、そのような個人に関する記述が『漢書』の場合、何故武帝期以降の人士にのみ見られるのか、ということである。逆に、武帝期以前においては何故「少孤」は問題にならなかったのであろうか、と言い換えてもよい。これに対しては、前漢武帝期までは戦争が多発し、孤児の発生要因も多かったから、孤児の存在はありきたりの日常茶飯事で、特に孤児

であることが特筆されなければならないということにはならなかった。或いは、武帝期以前においては何らかの理由に因って、「少孤」であることはそれほど個人の生育あるいは社会的活動にとって障害にならなかったのではないか、という回答が一応提出できよう。しかしそれは何故そうなのかと再び問うたとき、漢代史の展開過程の中に孤児の生育の様態を置いて考える必要が生じよう。

戦国から漢初にかけては、戦乱の時代であり、孤児が多数輩出したことは推測に難くない。彼ら孤児たちは一体どうなったのであろうか。これについて直接的には全く手がかりはない。しかし、戦国から前漢にかけて、特に秦末から漢初の史籍にしばしば出てくる「少年」・「悪少年」と呼ばれる存在が、それら孤児たちの名称を変えた姿なのではなからうか。

『史記』巻八九張耳・陳余列伝に、刺通が范陽令に言った言葉として、
足下爲范陽令十年矣。殺人之父、孤人之子、斷人之足、黥人之首、不可勝數。然而慈父孝子莫敢事刃公之腹中者、畏秦法耳。今天下大亂、秦法不施、然則慈父孝子且事刃公之腹中、以成其名。……君堅守范陽、少年皆爭殺君、下武信君云々。

とある。『漢書』卷四五酈通伝ではそのように明確に言っていないが、『史記』の記述の方が当時の実状に近いと言うべきであろう。「人の父を殺し、人の子を孤にする」原因は、ここでは秦法の執行によると判断されるが、兵役や徭役への徴発をもそれは含んでいると考えても大過無いであろう。「少年」とは、漢代郷里の父老・子弟関係という、年長者の指導と年少者の服従関係からはみ出した、任侠者に附従する無頼の徒の予備軍である。彼らは秦漢の交において、任侠者を首領に選び、各地で中央から派遣された地方官を殺して、反秦集団として決起していた。上

掲の史料にいう事態の背景にそのような動きが全国的に存在していたのである。『漢書』卷三一項籍伝に、

陳嬰者故東陽令史、居県素信、爲長者。東陽少年殺其令、相聚數千人。欲立長無適用、洒請陳嬰、嬰謝不能、遂強立之。県中從之者得二万人。

とあり、『漢書』卷三四彭越伝に、

彭越字仲、昌邑人也。常漁鉅野沢中爲盜。陳勝起、或謂越曰、豪傑相立畔秦、仲可効之。越曰兩竜方闘、且待之。居歳余、沢間少年相聚數百余人、往從越、請仲爲長、越謝不願也、少年強請、乃許。

とある。他にも、酈商は「聚少年得數千人」たし、張良は「聚少年百余人」と記録にある。

父老―子弟關係に包摂される人々は、農耕を生業とする生産者集団であるのに対して、少年達は農耕に勤めない厄介者でもあった。もし彼らが孤児の生育した結果であると考えれば、もともと父のいない、ということは継承すべき家業をもたなく運命づけられた者達という意味で、父老―子弟關係からはみ出し易い社会的存在であったことと符合するのではなからうか。もとより、劉邦のように父親が健在で孤児ではなかったものでも任侠者となる場合もあるし、孤児であっても、父の財産が残され、母や同族がそれを頼りにしっかりと孤児を養育すれば、少年への道を回避できたであろう。しかし、単寒なる貧家の出身であれば、生きのびていくためには、父老―子弟の維持する里の規範から逸脱することも多くあり得たのではなからうか。『漢書』卷三四韓信伝に、母の死に葬式も満足に出せず、亭長や洗濯女に寄食するほどの貧乏であった韓信が、少年達から侮辱を受け、項梁の起兵に際して其の軍に投ずることがみえている。韓信は恐らく孤児であり、亭長に寄食していることや、少年達

との関わりから考えて、少年達と比べて少し年長にはなっていたけれども、やはり少年出身の任侠の徒ではなかったかと思われる。このように、当時、反乱集団に投じた孤児出身者が多かったことは推測に難くない。

劉邦集団においても、『漢書』高祖本紀に、「於是少年豪吏如蕭（何）曹（參）樊噲等皆爲收沛子弟得三千人」とあるように、少年がその構成の要素になっていることは上述の当時の反乱集団が少年によって構成されていることと事態は同一である。そのような、任侠者と少年が中核となった反乱集団が、子弟をその戦闘集団内に取り込みながら、次第にその勢力を増していくことは、項梁・項羽の集団においても同様である（『漢書』項籍伝参照）。秦の苛酷な政治によって生み出された孤児達によって、秦朝は復讐されたという皮肉な結果を生んだのである。

以上見てきたように、戦国から漢初にかけては、孤児を多く含むと思われる少年達の生きる場所は存在していた。彼らには相互扶助の世界が存在し、また周辺の郷里の人々の保護を受けながら彼らは成長し、任侠的世界の中でその生存の糧を得ていったように想像される。このような孤児から少年へと生き延びていく世界はそれでは、戦乱が一応おさまったその後の漢代社会ではどうなっていたのであろうか。少年の語に注目して『漢書』を見ていくと、前漢全時期を通じて少年に関する記述がみられる。それらはおおむね郷里社会における父老子弟關係の価値観からすると否定的な行動と映る任侠の世界に付属して生きる若者の姿を映し出している。特に注目すべきは、武帝・昭帝期に限定してのことであるが、辺境への戦闘に、「郡国惡少年」として徵発、動員がかかっていることである。一回に數万という数字が残されている²⁰。懲罰或いは治安維持のために各郡国から惡少年を徵発したのであろうが、彼らが武技に長じていたことが戦闘要員として適していると見なされたことも考えら

れる。とにかく、国家の側からすると依然として少年の生きる世界は取締の対象となっていたようである。前漢末の戦乱時においても、あの有名な呂母が立ち上がるために面倒を見て配下に置いたのは少年たちであった如く、各集団に孤児出身の少年達が多く属していたであろう。ところがこれに対して、『後漢書』では、数例あるのみで、少年の姿が全く影をひそめてしまう。このように、両漢書における「少孤」の事例数と「少年」のそれとが反比例することは一体どういうことを意味しているのであろうか。これも単に、両漢書の著者の著述態度・史料選択の相違にのみ由るのであろうか。この疑問については更に別の角度からも前後の漢代社会の相違として考えられなければならない。

次に、皇帝による鰥寡孤独への賑恤について見ておくことにする。両漢書の本紀を通覧すると、前漢初・前漢末から後漢初・後漢末という戦乱時期を除き、皇帝別の回数には相違があるが、ほぼ両漢にわたって賜爵の際などに付随して鰥寡孤独への賑恤がなされている。それは第一節で見たとうりの理由によるものであろう。実際に、皇帝の側からしても、地方官への鰥寡孤独への賑恤の徹底が図られている。例えば、『漢書』文帝紀の文帝即位の年に、鰥寡孤独に対する賑恤の方策を下問して、「具爲令」と命じている。それによれば、県の令長・丞尉や嗇夫・令史が詔令どりに実施しているかを二千石や郡吏が監督することになっている。この「令」の具体的現れとして、『漢書』卷八九循吏伝の黃霸の条に、

太守霸爲選択良吏、分部宣布詔令、令民咸知上意、使郵亭鄉官皆畜鵝豚、以贍鰥寡貧窮者……鰥寡孤独有死無以葬者、鄉部書言、霸具爲区処、某所大木以爲棺、某亭猪子可以祭、吏往皆如言、其識事聰明如此。

とあり、また、同伝朱邑の条に、

廬江舒人也。少時爲舒鄉嗇夫、廉平不苛、以愛利爲行、未嘗笞辱人、存問耆老孤寡、遇之有恩、所部吏民愛敬焉。

ともある。これらは、武帝・宣帝期の循吏の行為として記述されているが、黄覇伝にある、上意の周知徹底というのは、『漢書』・『後漢書』双方の本紀に頻見する、鰥寡孤独への皇帝の恩恵、それはいろいろな形をとるが、それを地方官として文帝期の「令」に沿って具体的に実践している事を指している。ただ、両漢書を通覧しても、鰥寡孤独賑恤に対する地方官監督の例は、あまり見いだすことができず、実態は、文帝も問題にしているような地方の官吏の不正行為が多く存在したのではないだろうか。国家による孤寡賑恤は、賜爵に伴う鰥寡孤独への賜与も含めて日常的なもので得ず、限界のあるものではなかったか。このように皇帝による孤寡賑恤から見た場合、国家の孤寡への両漢王朝の対応に相違があったとは考えられず、本節冒頭の問題に関する解答を引き出すことはできない。従って、両漢書の孤児史料に関する相違の理由は、それぞれの時期の家族・宗族の相互扶助との関係において考えられなければならない。

宇都宮清吉氏の「漢代における家と豪族」その他の論考によれば、漢代の郷村社会には、三族制家族の分財別居によって生じた三族グループがいくつも存在しており、それらは血縁的においちかひの相違はあれ、倫理的・生活感情的に緊密な結合関係を持った一つの血縁的集団を構成していた。これが宗族といわれるものである。その外側にはさらに血縁の薄い、また故旧と呼ばれる人々がおり、これらをひっくるめて九族・郷党と呼んだのである。当時の郷里特に里の構成はそのような組織であった。里中の人妻は、里母或いは諸母といわれるように、里はもともと家

族共同体の延長であり、或いは少なくとも、里の生活は家族共同体の延長であるという感情が里生活の奥底に存在していた。経済的には厳密に独立した諸家族から構成される宗族内においては、しかし、富めるものと貧しきもの、幸と不幸千差万別の状態にある家族群が存在した。一般に宗族内の貧窮な家族に対する散与は美德とされていた。自己の一家の経営ばかりに夢中になるのはエゴイストとして非難される。一族内での相互扶助は族生活の不文律であった、と。第二節に掲げた孤児史料にも諸父や族父による養育事例が見られることから、恐らく宇都宮氏の指摘の通りであつたろうと思われる。しかしここで言われているのは、同族の背景を持つ家族についてであつて、そのような宗族の規模がきわめて小さいか或いは宗族を構成し得ない単家層についてはその限りとはいえないであらう。

以上の宇都宮氏の指摘と、少年の存在が後漢に入ると希薄となることを付き合わせて考えると、宇都宮氏の指摘するような郷里社会における同族的相互扶助関係は、漢代前期には未だ普遍的ではなかったのではないかと推測されてくる。何となれば、少年のような存在は、同族的相互扶助による孤児養育がしっかりと行われない状況において見られる現象であらうからである。武帝期頃から「少孤」の事例が出現し始めることとの関係で言えば、武帝期までの郷里社会の構成は、富の所有の点で平均的な家族群が圧倒的に多く、そこでは宇都宮氏の言う家族共同体的里社会の内部で鰥寡孤独に対する援助が共同的に遂行されているような社会関係が基本で、富裕な同族の家が中心となるというものでは必ずしもなかったのではなからうか。前漢後半期から後漢に入ると、同族特に父の兄弟による孤児養育の事例が増加するのは、宇都宮氏の指摘するような同族による貧窮者救済が普遍化あるいは義務化したことに因るので

はなからうか。逆に言えば、里社会の共同的相互扶助機能の低下である。これを、漢代家族・宗族の問題からみると、武帝期までの里社会は単家族による構成が主であり同族的結合があまり進捗せず、それ以降において所謂豪族と単家層への里社会の階層分化が進行するという漢代社会展開の大勢に合致するのではないか。

5 皇帝の家における孤児―結語に代えて―

最後に、政治上における孤児の問題に一考を加えることにしたい。皇帝の家においても、皇帝や諸王を「孤」ということは前漢・後漢を通じてみられる²³。先述の如く、孤児の養育主体の順序は、母↓同族↓外家の順と一応考えたのであるが、政治上の事柄として、外戚による幼少な皇帝の後見がある。これは第三節で述べた(A)の場合と実は同一で、母(実母でなくとも前皇帝の皇后であればよい)とともに居る例に含まれるのであるが、民間の父方の同族援助とは異なり、母方の族、とりわけ皇后の父や兄弟つまり、幼帝から言えば外祖父か舅が幼帝たる外孫あるいは外甥の政治的後見の役割を果たすのである。民間での(A)の場合であれば、父の族とくに父の兄弟の援助が当然なされると推測されるが、皇室という特殊な族、つまり政治権力を掌握した族であることから、同族内の成人男子の後見は、権力奪取や同族内での権力闘争を生じ易いところから避けられたものと思われるし、皇帝の伯叔父や兄弟は諸侯王に封ぜられることから中央での皇帝の補佐は制度的には不可能となることからそれは生ずるのであらう²⁴。

ところで、漢代政治史において、外戚が登場するのは周知のように武帝死後の昭帝期の霍光の専権がその始まりである。霍光政権を外戚専権

の嚆矢と見るか否かは議論が分かれるであろうが、かつて拙論でも述べたように、それを後漢代に展開される外戚政治⁽²⁶⁾貴戚政の端緒と見なしでもよいと考える。とすると、何故この時期に貴戚政が始まるのかという疑問は、郷里社会における親族関係の変化の問題と何らかに関連させて解くことができるのではないかとこの予測をもたらす。

以上の問題に関連して興味深い指摘が佐竹靖彦氏によってなされている。⁽²⁶⁾氏は、前漢後半期から後漢にかけて出嫁女性が族的結合の強化について大きな役割を担っていたとし、「後漢に入るとこれまでみてきたような一定の有力な家族を中心とする族的結合の強化の段階から、複数の有力宗族の相互の結びつきの強化の段階に達し、そこでは一方の宗族女性の出嫁先からみれば、当該宗族は妻族母族となるような相互関係が成立しつつあったと思われる」と言っている。このような観方は、孤児史料に即してみると、前漢にははっきりとは現れない外家による孤児養育の例が後漢から三国にかけて多くなるということと相符合するものである。なぜそうなるのか。これは憶測ではあるが、父の兄弟つまり伯叔父が生存していない場合、あるいは伯叔父による孤児養育が不可能な場合に、外家扶養が行われるとすると（皇室の場合は伯叔父が存在しても政治的理由で後見できず、外戚後見が行われる）、父のもう一つ上の世代の系統の諸父・族父や従父兄弟などの結びつきよりも、母の族における母の父および兄弟という三族制的血縁関係者との関係の方が相対的に強化されるということに因るのではないだろうか。宇都宮氏のいう三族グループの強固な結合があり、それが外家つまり入嫁女性の三族制的血縁関係者との間に衛星的結合を次第に強め、そのような関係が相互に複雑に入り組んでいる親族姻戚関係の構図が浮かび上がってこないか。そして、前漢後半期から次第に政治的重要性を帯びてくる外戚による後見

が、このような親族姻戚関係の形成と共に明確な姿を呈してくることは考えられないであろうか。

漢代の孤児の問題の考察からここまで推論するのは行き過ぎではあるが、本稿での問題関心からすれば、孤児を誰が面倒見るかという事柄の中に、当時の家族や親族に関する観念が隠されていないかということである。しかしこれらは、漢代の家族・親族に関する全面的な考究によって確かめられなければならない、それは今後の課題としておきたい。

注

- (1) 佐竹靖彦「中国古代の家族と家族的社会秩序」(『東京大学文学報』一四一 一九八〇)
- (2) 『論語』泰伯篇に、「六尺之孤」なる語があり、両漢書にも散見される。これは父のいない幼少の君を指すが、劉宝楠の『論語正義』は鄭玄注の「六尺之孤、年十五已下」を引いて正確には十四以下であるとしている。
- (3) 本文に挙げた以外に、『漢書』卷四四淮南王長伝に、淮南王長が自ら「早失先帝少孤」と称した例がある。また、『漢書』卷六五東方朔伝に、館陶公主が愛幸した董偃に関する記述があり、董偃は孤児であった可能性が高い。
- (4) 上記の史料から、中央高官であったり、郡府に勤務していた父親が死亡した場合、一種の任子法として、孤児が優先的に採用されたと推測される。
- (5) 「外家」という場合、普通は母や妻の家を指すが、②の『東觀記』に見える姉婿の父が養育者となっているように、出嫁女性の嫁ぎ先をも含む可能性がある。④の朱暉の「外氏家屬」も或いはそうであったかもしれない。この点佐竹靖彦前掲論文では、『漢書』卷五九張安世伝の「霍氏外屬」を霍氏の母族・妻族ではなく、霍氏一族の女性の出嫁先と解している。従って、「外家」に含まれる姻族の対象範囲は明確ではないが、以下の行論では、母と孤児の密接な関係から考えて、「外家」の語を主として母の家を指して用いること

にする。

(6) 『後漢書』列伝三三朱暉伝。

(7) この他に、『漢書』卷三六劉向伝にある始皇帝陵の火災をもたらした牧兒の例、『漢書』卷五五衛青伝の、異母兄弟から奴畜視されていた衛青が父に牧羊させられていた例、赤眉の乱において、のち皇帝に推戴される劉盆子が赤眉軍中で子供達と共に牧牛をさせられていた例(『後漢書』列伝一劉盆子伝)、などがある。

(8) 一例を挙げれば、桓帝鄧皇后の母が梁紀なる者に改嫁した際、皇后も母に従って梁氏の姓を冒しているが、鄧后には鄧演という兄がおり、鄧姓を名乗っている(『後漢書』皇后紀下)。鄧演は恐らく母の最初の夫である鄧香(和帝皇后の従兄子)の家か一族に養育されたのであろう。

(9) 『後漢書』列伝一九鮑永伝に、「會遭母憂去官、悉以財産与孤弟子」とあり、この場合は母の死によって家産分割を行い、自分の取り分をも弟の孤兒に与えたのであろう。『後漢書』列伝二二樊准伝に、「父瑞好黄老言、清静少欲。準少勵志行、修儒術。以先父産業数百万、讓孤兄子」とある。また、『後漢書』列伝七三高鳳伝に、「鳳年老執志不倦、名声著聞。太守連召請、恐不得免、自言本巫家不応爲吏、又詐与寡嫂訟田、遂不仕。建初中、将作大匠任隗举鳳直言、到公車託病逃歸、推其財産悉与孤兄子、隱身漁釣、終於家」という興味深い話もみられる。

(10) 堀敏一「中国古代の家と戸」(『明治大学人文科学研究所紀要』二七冊 一九八九)

(11) 佐竹靖彦前掲論文

(12) 越智重明「漢時代の戸と家―主として戸籍制度面から見た―」(『史学雑誌』七十八編八号 一九六九)

(13) 『三国志』卷四三王平伝に、「巴西宕渠人也。本養外家何氏、後復姓王」とあり、馬忠と同様復姓している。或いは、このような復姓の習俗が巴西地域に存在していたのかも知れない。

(14) 杉山明「皇帝支配の原像―民爵賜与を手がかりに―」(松原正毅編『王権の位相』弘文堂 一九九一)の「民爵賜与事例表」によった。

(15) 西嶋定生「中国古代帝国の形成と構造」(『東京大学出版会』一九六一)第二章第三節で、民爵賜与の対象者についての検討がみられ、「爲父後者」とは家長の嗣子であり、年齢的には小男つまり十四歳以下の男子に対しても行われたとの結論がある。

(16) 牧野巽「漢代における家族の大きさ」(『漢学会雑誌』第三卷一号 一九三五) 同氏著『支那家族研究』生活社 一九四四に収録)

(17) 越智重明前掲論文

(18) 佐竹靖彦前掲論文で佐竹氏は、春秋戦国初期には五から十口の比較的大きな規模の、宗族の一分枝として家族の境界としては不明確ながら、父母妻子に若干の傍系親を加えた家(或いは室)が存在していたが、戦国中期以後分解して、いわゆる単家族が広汎に形成され、その一般的規模は五人以下であった。この単家族を基礎に、漢代に入ると父母妻子同産の同居による複合大家族が次第に上層部で形成されてくると、論じている。この結論は、従来の漢代家族論争の単家族か三族制家族かという対立点を戦国期から漢代に至る時期的変化の観点を導入しながら、上流階級大家族説をも継承して、統一的に捉えたものである。また、経済変動との関係を論じて、佐竹氏と同様な見解を提出したのが、稲葉一郎「漢代の家族形態と経済変動」(『東洋史研究』四三卷一号 一九八四)で、武帝期を境に、貨幣経済の沈滞や礼教意識の高揚によって次第に同居・複合家族への志向が、特に後漢時代に入ると顕著になってくる、とする。

(19) 二、三举例すれば、『漢書』卷四七梁王揖伝に、「済東王彭離、驕悍昏莫、私与其奴亡命少年数十人行剽殺人、取财物、以爲好」とあり、同卷七六趙廣漢伝に、「長安少年数人会窮里空舍、謀共劫人」とあり、同卷九〇尹賞伝に、「長安中姦猾浸多、閭里少年群輩殺吏、受球報仇」とある。

(20) 『漢書』昭帝紀元鳳五年条に、「発三輔及郡国惡少年・吏有告劾亡者、屯遼東」とあり、同卷六一李廣利伝に、「太初元年、以廣利爲貳師將軍。發属国六千騎、及郡国惡少年数万、以往」とある。

(21) 検索し得た限りで以下の三例がある。列伝一劉盆子伝の呂母の下に集まった少年達。列伝一四馬援伝に、「援自還京師、数被進見。爲人明須髮、眉目

如畫。閑於進對、尤善述前世行事。每言及三輔長者、下至閭里少年、皆可觀聽」とある。いま一つの例として、列伝一五劉寬伝に、「每行県、止息亭伝、輒引学官祭酒及处士諸生、執經對講。見父老慰以農里之言、少年勉以孝悌之訓」とある。

(22) 宇都宮清吉「漢代における家と豪族」『漢代社会経済史研究』弘文堂書房一九五五・「中国古代中世史把握のための一視角」『中国古代中世史研究』創文社 一九七七

(23) 皇太子に関して、「幼孤」とか「早失母」という表現があり『漢書』卷六八霍光伝・卷七三章玄成伝、また皇帝自身の語として「朕幼而孤」という場合もある『漢書』卷七七鄭崇伝。

(24) 『後漢書』列伝三二東平王蒼伝に、「自漢興以来、宗室子弟無得在公卿位者」とあり、漢代では、皇室子弟は三公九卿に就任できないという不文律があったようである。

(25) 東晋次「漢代の貴戚に関する覚書」『愛媛大学教育学部紀要 人文・社会科学』第十四卷 一九八二

(26) 佐竹靖彦前掲論文